

日本中近世の資源消費にかかる社会構造変化と技術変化

山田昌久（首都大学東京）

はじめに

「古代社会からの変貌とその担い手たちの消費拡大」。石川県は羽咋市寺家遺跡や穴水町西川島遺跡などの湿地遺跡の発掘によって、日本の古代～中世社会（地方社会）の形成の様子を発信してきた。

12世紀は一言でいえば、律令制による国家体制や、10～11世紀に国司に大幅な行政権を移行させて、そこから租税進納させる体制にいたる、中央貴族社会から地方貴族社会への拡大した貴族のための制度が組み替えられた時代である。さらに、郡司・郷司層が墾田して開発領主が誕生するなど、やがて権門から独立する新たな階層が登場した。やがて、武士の登場、そして地方社会の形成、さらには都市住民層の形成などが続いた。

福岡県の博多遺跡群の調査、大分県大友氏関係遺跡群の調査、広島県草戸千軒町遺跡の調査、大阪府堺遺跡群の調査など、中世の交易・商業集団の実態を伺わせる遺跡調査成果。大坂の市街地形成や江戸の市街地形成など、16世紀以降の都市住民層の登場を示す遺跡群の調査。それらが進むと、資源消費の構造変化や技術変化の論点が浮かび上がった。

このような資源消費にかかる社会構造変化は、経済活動の変化や技術変化と連動していたことについての話題提供である。

1. 漆の技術

西川島遺跡の調査以降、四柳嘉章はこの時期以降の漆器研究に邁進し、多くの成果を発表した。12世紀からの漆器の技術には、平野材であるケヤキを素材とし精巧な塗装技術を有する古代の漆器とは異なる、トチノキやブナなどの山地材を使用した炭粉渋下地の簡易塗装の漆器群が存在した（スライド3）。それは、日本各地に木地師集団が分散して漆器生産が始まり、新しい階層に拡大した漆器利用への対応した技術変化が確認された。

縄文時代から古代の遺跡からは、漆の木に間隔をあけて傷を回し付けた遺物が確認（スライド4）されていて、9～10世紀までの漆生産が類似した技術基盤で行われていたことが分かる。しかし中世期の技術を判断する遺物は無く、18世紀の遺跡からは、現在の漆採取法に近い、溝切り段数を重ねて溝内に浸潤した漆液を掻きとる方式を見せる遺物が発見されている。

つまり、中世前期の本地の生産方式生産量の変化に対応したであろう、漆生産の技術変化を示す資料は現時点では無いのである。ただ、中世後半以降における漆液の増量を示す資料や遺物は確認できる。16世紀から17世紀、日本は漆の輸入国であった。つまり漆使用者層の拡大、とりわけ漆都市生活者層の拡大に対して図られたのは、南蛮貿易・中国貿易による使用漆液の確保（スライド6・7）であった。その漆液には、ハゼノキの樹液も含まれていたと考えられる（このことは日本列島西南部での古い時代の漆器の樹液の議論にも発展するが）。18世紀の各大名の領地経済対策によって、漆の木の植栽が奨励されたことは、上杉鷹山を描いた藤沢周平の『漆の実のみのる国』他で、多くの人々に知れ渡っている。つまり、江戸後期に増産した漆の木を、現在の技術で掻きとって漆生産は変化（スライド4）したと考えられる。

2. 製材技術

打ち割り製材から縦挽き製材への移行を示す遺物は、各地の16世紀の遺跡から認められる。打ち割り製材は、節（幹の内部に残るかつての枝の痕跡）があると実行しにくいいため、1 m以下の太さの木では有効材確保の生産性が低い。そこで、弥生時代以降、1.5～2 mを越える木を得ての製材が実行されていた。

それに対して、鋸引きで製材することになると、節も挽き切ることができるので、縦挽き製材であれば、50～60cmほどの太さの木でも角材・板材を生産できる（スライド12・13）。つまり、植林して3世代程度の時間をかけるだけの森を、資源地をすることができるのである。このことも、急速に拡大した都市生活者のための建築用材調達に、大きく貢献する技術変化であった。比重の小さいスギ・ヒノキなどの針葉樹は、さらに移送にも適しており、江戸・大阪への回送経済構想（スライド14・15）が図られた。

3. 燃料材の確保

「おじいさんは山に柴刈りに……」。柴を刈ることは石斧では困難である。なぜならば、細い枝は撓って、石の刃先が切り進むことを妨げるからである。すると、里山から6～7年生の柴材を調達して自家消費に充てることは、鉋や柴刈り鎌の登場以降に行われた、ということになる。大きな荷重をかける柴刈り鎌は、茎を作り出してから生まれたと考えられるから、弥生時代・古墳時代の折り曲げ式固定の鎌の段階では、まだ作ることができない。また、刃幅を長くした鉋も、固定部に大きな荷重がかかるので、古代後半以降に普及する。里山経済下の村人の燃料は、太い木を割ってつくった薪であったと考えられる。

また、近世に入って柴刈りが可能になって以降も、都市住民層の燃料材は柴材の回送は「かさ」が大きく効率的でないため、薪材が多用された。上位階層者は炭の使用が可能であっても、庶民層の燃料材は薪で、江戸では個別住宅での薪使用量まで対応できないため、外食も発達して燃料消費を抑えた。

4. 農具の変化

弥生時代の農耕技術について、不耕起であったことを提示して以降、農耕技術についての再検討を行ってきた。U字型の鉄製刃先を付けた古墳時代の鍬鋤の切削痕は明瞭に水田床土に残っているのに、弥生時代の水田床土にはその痕跡が見られないこと、鍬の裏に蟻溝などの技術で頑丈に付けられた「泥除け」は耕起の邪魔になっていたが、U字型刃先を付けるようになると消失し、掘削の障害は取り払われる。国家的な徴税を計画するには、生産量の拡大を行わないでいては、生産者は疲弊する。畜力耕作もふくめ、古墳時代後期にはアジア社会に伍する国家を目指した大和政権は、経済政策無しで徴税することは、結果的には生産破綻を起こすことを理解していた。

近世の風呂鍬に似たU字型鉄刃先の導入は、鍬の側縁部を使用して土を動かす作業にも効果を発揮した。

やがてU字刃先は、16世紀には鍬の両側縁のすべてを鉄で覆う、風呂鍬へと変化した。鍬扱いは切削以外の操作が効率よくできるようになった。この土木技法の変化は、耕作地を様々な地勢にまで広げた。



スライド 1



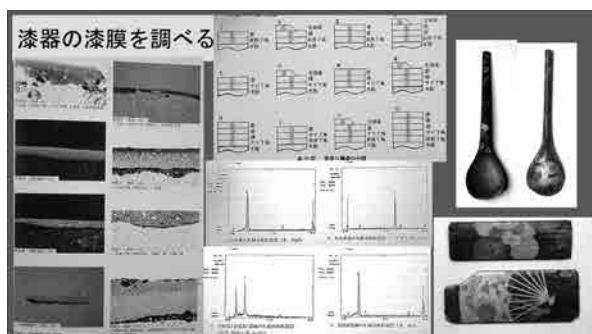
スライド 5



スライド 2



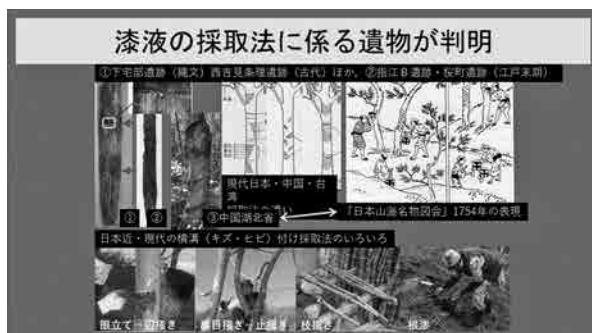
スライド 6



スライド 3



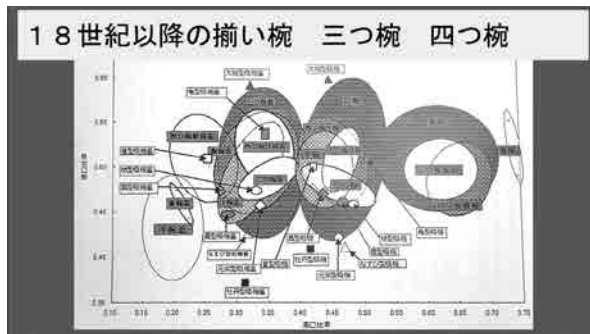
スライド 7



スライド 4



スライド 8



スライド 9



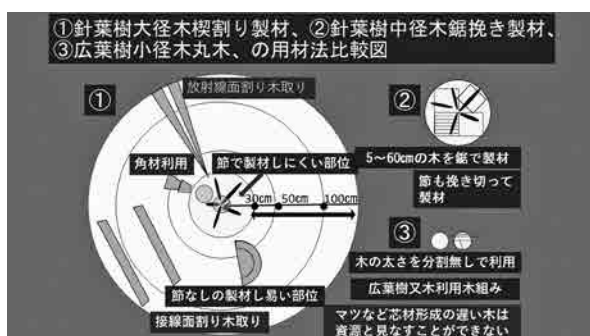
スライド 13



スライド 10



スライド 14



スライド 11



スライド 15



スライド 12

古代能登の挽物について

久田正弘

1. はじめに

古代能登の挽物の概要を報告するが、図の番号・参考文献などは『石川県埋蔵文化財情報第41号』（久田2019）を参照されたい。

2. 能登国挽物の事例

能登国は、718年（養老2年）越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲郡を分割されて成立したが、741年（天平13年）に越中国に併合され、757年（天平宝字元年）に再び分国した。旧羽咋郡内では4遺跡（1～4）10点（ケヤキ6：ケヤキ？3：スギ1、盤6：椀3：皿1）を確認した。旧能登郡内では9遺跡（5～13）47点（ケヤキ14：ケヤキ？15：スギ17：不明1、盤43：椀4、黒漆塗4）を確認した。旧鳳至郡内では2遺跡（14・15）3点（ケヤキ3、黒漆塗盤3）を確認した。旧珠洲郡内では2遺跡（16・17）7点（ケヤキ？3：スギ2：スギ？1：不明1、盤6：皿1）を確認した。

3. 遺跡の性格

17遺跡の性格（複数の事例あり）は、郷の関連施設8遺跡、神社・寺院関係3遺跡（3・4・7）、工房3遺跡（3・13・16）、祭祀関係1遺跡（9）が確認された。国衙・郡衙・郷や神社などで工房を持っていた可能性がある。樹種でみると、能登国出土67点中ケヤキ23点：ケヤキ？21点：不明2点：スギ？1点：スギ20点が確認された。その結果、ケヤキ系65.7%：スギ系34.3%である。寺家遺跡と下笠師E遺跡の樹種は全てケヤキであり、他の遺跡はケヤキもあるがスギが多いので、旧能登国の挽物は上位の遺跡ではケヤキが主体、下位の遺跡ではケヤキもあるがスギも多いことが伺えた。

4. 製作工程について

新潟県糸魚川市大所地区での工程段階（重要有形文化財）は、カタウチ、ナカキリ、アラビキ、ナカビキ、シアゲと呼ばれ、その呼び名に合わせると、古代ではカタウチ・ナカキリ、ナカビキかシアゲも確認される。ナカキリは古代・中世・昭和・現代でも刃幅以外はあまり差がみられない。69はカタウチの可能性が高く、スギの挽物は能登では中世初頭まで存在した可能性が想定される。

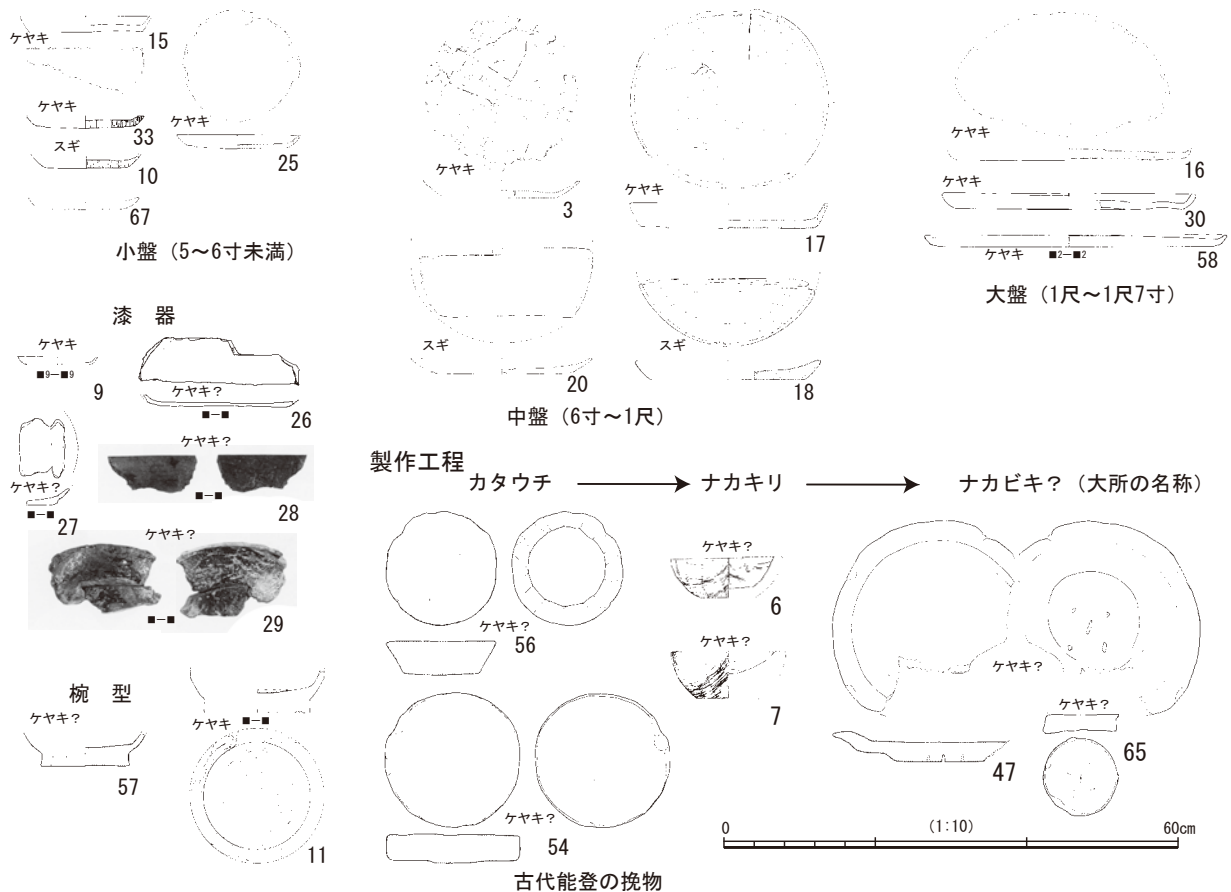
5. まとめにかえて

古代の木盤・漆盤のサイズは『延喜式』『観心寺勘録縁起資財帳』から、小盤、中盤、大盤に分かれ、小盤（5寸148mm～6寸177.6mm未満）：ケヤキ5点、スギ？2点、直径10・14・16cmのサイズが確認される。中盤（6寸以上～1尺2960mm未満）：ケヤキ、スギも一定量あり、直径20～22cm程度（7～7.5寸）、24～25cm程度（8～8.5寸）、28～29cm（9.5寸）程度が確認される。大盤（1尺以上1尺7寸503.2mm程度）3点は全てケヤキである。

能登の古代挽物では、大盤はケヤキのみであり、スギは公的に下位の遺跡に多い傾向が伺えた。

参考文献

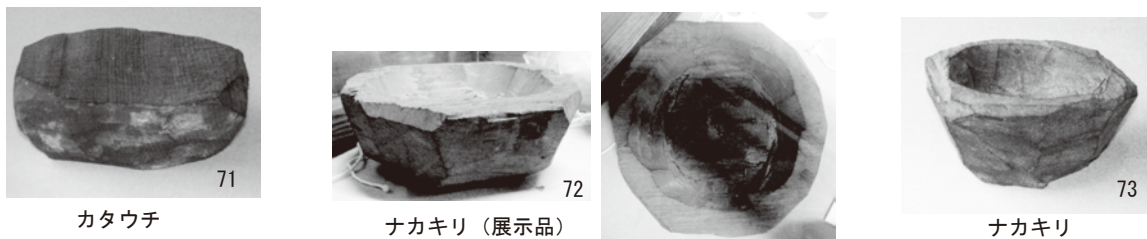
久田正弘 2019 「古代能登の挽物について」『石川県埋蔵文化財情報第41号』（公財）石川県埋蔵文化財センター



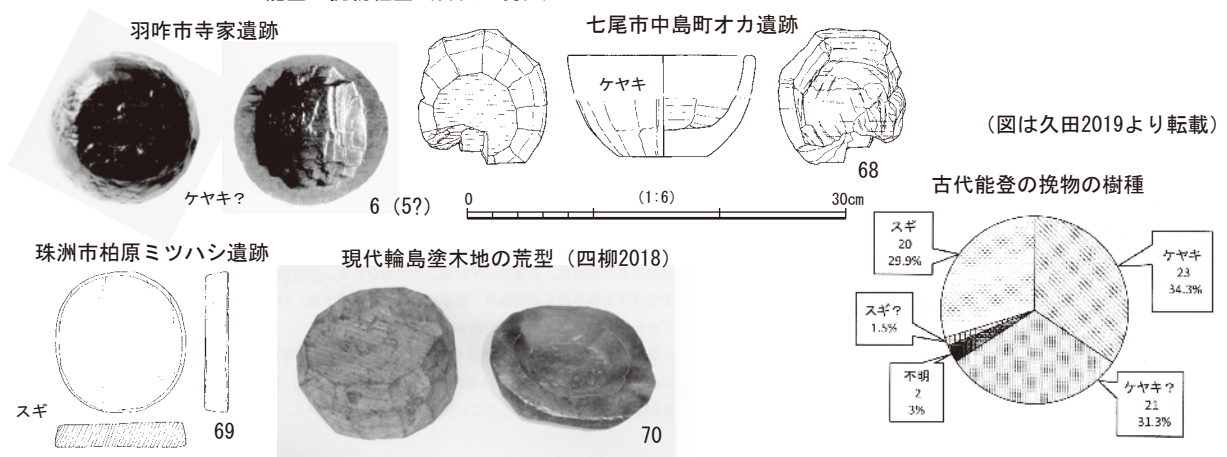
遺跡名と報告番号 (久田2019を参照)

1 宝達志水町二口かみあれた遺跡(1), 2 羽咋市吉崎・次場遺跡(2), 3 寺家遺跡(3~9), 4 志賀町福井ナカミチ遺跡(10), 5 羽咋市四柳白山下遺跡(11~15), 6 羽咋市四柳ミッコ遺跡(16~25), 7 七尾市能登国分寺跡(26・27), 8 小池川原地区遺跡(28・29), 9 小島西遺跡(30~34), 10 吉田C遺跡(35), 11 杉森テラアト遺跡(36), 12 三引遺跡(37~46), 13 下笠師E遺跡(47~57), 14 輪島市釜屋谷B遺跡(58), 15 輪島市時国古屋敷遺跡(59・60), 16 能登町真脇遺跡(61~66), 17 珠洲市南方遺跡(67)

糸魚川大所地区木地屋民俗資料館の荒型 (図録・展示品)



能登の挽物粗型 (古代~現代)



古代北加賀における挽物容器の集成

熊谷葉月

はじめに

今回の研究集会テーマは「古代・中世の木製容器」である。その中で本報告は、木製容器のうち挽物を取り上げた。地域を北加賀地域（旧加賀郡と旧石川郡、現在のかほく市南部から白山市北部）、時期を7～10世紀を対象として集成を試みた。報告書から該当する資料を抽出する作業を金山哲哉（当センター調査部）と共同で行った。報告書の観察表記載を基本として、報告本文、図版から読み取れることを一部加えて一覧表を作成し、当日資料に掲載した。計測表の項目、器種などの相違点や矛盾点が解消されないままの掲載となっているが、現段階での状況と傾向をみて、今後の課題について挙げる機会としたい。

先行研究について

北陸の出土木製容器について弥生～中世までを網羅した、川畑誠 1996「北陸地方の木製食器の概要」『第39回埋蔵文化財集會 古代の木製食器』がある。また、能登地方については、その後増加した資料を加えてまとめ、樹種の観点も加えた、久田正弘 2019「古代能登の挽物について」『石川県埋蔵文化財情報第41号』に示されている。川畑氏が8世紀～10世紀前半の状況について、「盤、杯、碗、皿は土製（金属製）食器と共通する形態が大部分を占め、挽物盤が主体をなす。この盤は当初より数法量が存在し、その法量より共用器的性格を持つと推定される」「地域差を反映した細部の形態差をもつ」としている。今回の集計でも盤の数が突出している。また「9世紀中葉以降、法量より個人食器的性格の強い恣器系の器種（皿、碗）が加わる」とされており、9～10世紀の皿、有台皿、有台碗についてそのような雰囲気が見られる。

全般的見て、資料数は増加しているが、川畑氏が示された状況に大きな変化はないものと考えられる。

集計結果から見えること

集計の結果、以下の20遺跡143点を抽出した。該当遺跡は次の通りである。うち、分析により樹種同定されているもの、あるいは肉眼観察による針葉樹、広葉樹の記載のあるものが○数字の11遺跡82点であった。

- ①指江遺跡・指江B遺跡（かほく市）②加茂遺跡・加茂廃寺跡（津幡町）③北中条遺跡（津幡町）
4 千木ヤシキダ遺跡 5 磯部カンダ遺跡 6 戸水C遺跡 ⑦大友E遺跡 ⑧大友西遺跡
9 戸水大西遺跡 ⑩無量寺C遺跡 ⑪畝田B遺跡 ⑫畝田・寺中遺跡 ⑬畝田ナベタ遺跡
14 金石本町遺跡 ⑮藤江B遺跡 16 ニツ寺遺跡 17 三小牛ハバ遺跡 ⑯中屋サワ遺跡
19 上荒屋遺跡 20 横江庄遺跡（白山市）（※4～19（金沢市））

これらを遺跡ごと器種別、器種と樹種別、遺跡と樹種別のそれぞれについて点数を集計した。この結果から見られる傾向について以下に記載する。

1 器種について

盤・皿類が大半を占める（143 点中 97 点）。指江遺跡・指江 B 遺跡の 26 点、上荒屋遺跡の 25 点が突出している。次いで漆器碗（24 点）である。畝田・寺中遺跡（12 点）が目立っている。

2 使用材について

ケヤキがとくに多く（82 点中 48 点）、次いでトチノキ（12 点）、スギ（8 点）と続く。

3 遺跡の分布および性格について

とくに金沢市北西部日本海沿岸地域に集中する状況が見られた。発掘調査が多く行われている地域であり、沖積低地で河川跡が多いため木製遺物が残りやすい環境であることが大きい。公的施設に関連する性格の遺跡が多いことも要因の一つであろう。港湾関連（金石本町、畝田・寺中遺跡、戸水 C 遺跡）、荘園関連（藤江 B 遺跡、上荒屋遺跡、横江庄遺跡）、官衙関連（加茂遺跡、北中条遺跡）、寺院（三小牛ハバ遺跡）等の公的性格の強い遺跡からの出土が多い。

今後の課題

時期ごと、大きさ、形状の変化の傾向の抽出が必要となると考えられる。研究集会での報告時にも記載漏れ、誤記載等の訂正、表現の違いの統一化が必要なことも認識しており、掲載資料に中世に属するものも含まれているのではないかという指摘もあった。また荒型など未製品の存在についても確認が必要ではという意見があった。本稿でも十分な見直しができないままであり、南加賀の資料を含めて集成、検討していく中で改善していきたい。

①遺跡・器種別 集計

	①	②	③	4	5	6	⑦	⑧	9	⑩	⑪	⑫	⑬	14	⑮	16	17	⑱	19	20	
	指江	加茂	北中条	千木	磯部	戸水C	大友E	大友西	戸水大	無量C	畝田B	畝・寺	畝田+	金石本	藤江B	二ツ寺	三小牛	中屋+	上荒屋	横江庄	計
皿・盤類	26	12	7			1	7	1	2		1	9		3	1	1		1	25		97
漆皿・盤類				1				1	3				1						1	1	8
杯・碗類		2			2					1							1				6
漆碗類		2					1	1	1			12					1		5	1	24
鉢							1														1
漆器鉢	1																				1
漆器高杯脚									1												1
漆器小壺																		1			1
蓋?																			1		1
不明		3																			3
計	27	19	7	1	2	1	9	3	7	1	1	21	1	3	1	1	2	2	32	2	143

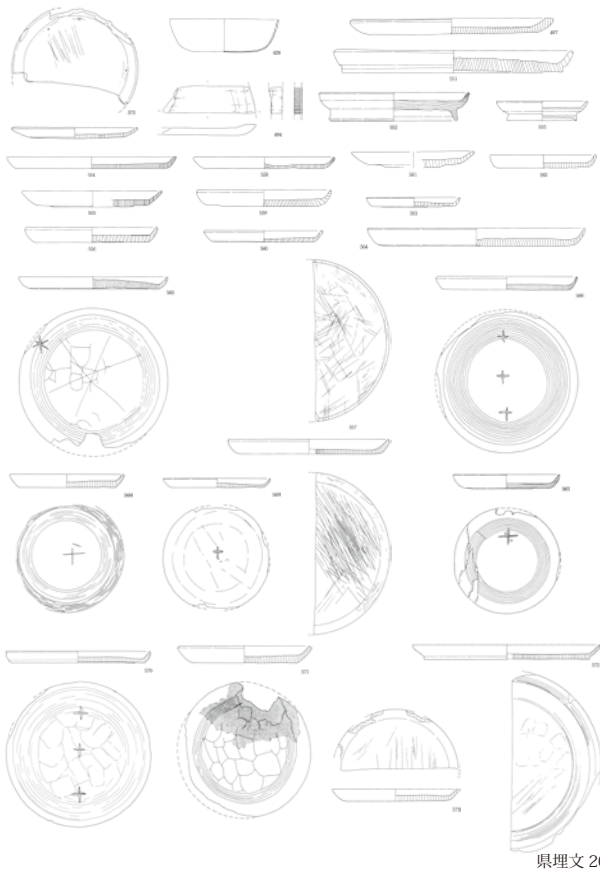
②樹種・器種別 集計

	ケヤキ	スギ	トチノキ	キハダ	ヒノキ材	ツバキ属	針葉樹	広葉樹	計
皿・盤類	34	7	3	1	1		4	5	55
漆皿・盤類	1								1
杯・碗類	4								4
漆器碗	7	1	7						15
鉢								2	2
漆鉢	1								1
漆器高杯脚									0
漆器小壺						1			1
蓋?									0
不明	1		2						3
計	48	8	12	1	1	1	4	7	82

③遺跡・樹種別 集計

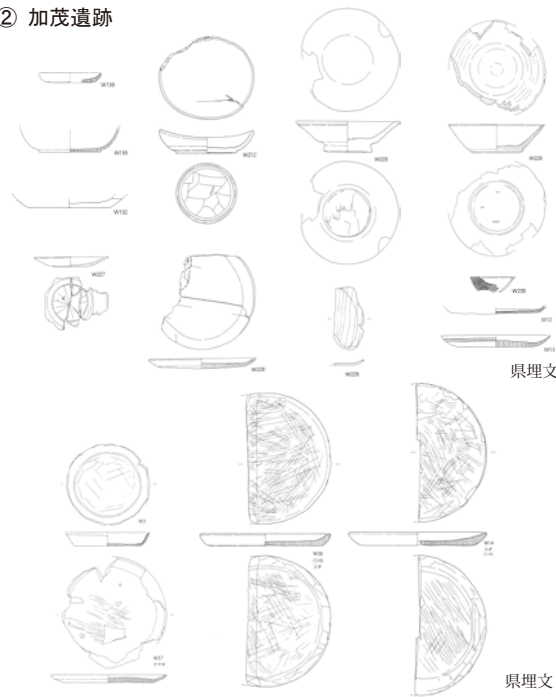
	①	②	③	⑦	⑧	⑩	⑪	⑫	⑬	⑮	⑱	
	指江	加茂	北中条	大友E	大友西	無量C	畝田B	畝・寺	畝田+	藤江B	中屋+	計
ケヤキ	21	11			2	1		11	1	1		48
スギ	3	3						2				8
トチノキ	3	2		1	1			5				12
キハダ								1				1
ヒノキ材								1				1
ツバキ属											1	1
針葉樹			2					1			1	4
広葉樹				7								7
計	27	16	2	8	3	1	1	20	1	1	2	82

① 指江遺跡・指江B遺跡



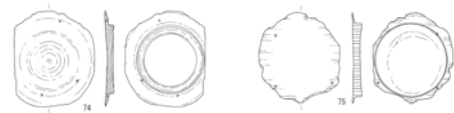
県埋文 2002

② 加茂遺跡



県埋文 2009

② 加茂・加茂廃寺遺跡

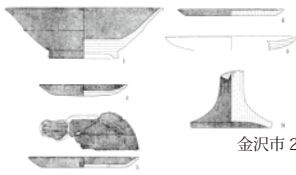


⑧ 大友西遺跡

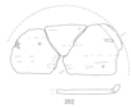


金沢市 2002

⑨ 戸水大西遺跡



金沢市 2000



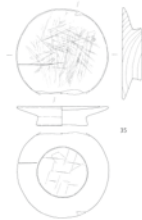
金沢市 2001

⑩ 無量寺 C 遺跡



県埋文 2004

⑪ 畝田 B 遺跡



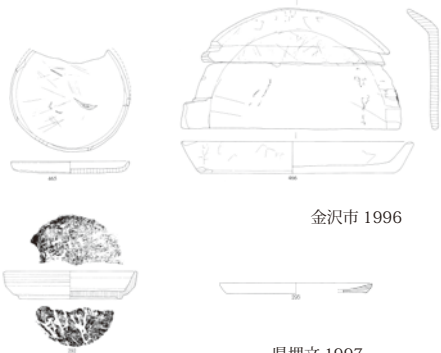
県埋文 2017

⑬ 畝田ナベタ遺跡



県埋文 2005

⑭ 金石本町遺跡



金沢市 1996

県埋文 1997

⑮ 藤江 B 遺跡



県埋文 2001

⑰ 三小牛ハバ遺跡



金沢市 1994

⑯ ニツ寺遺跡



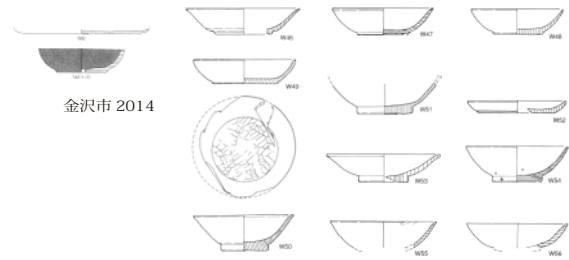
県埋文 2016

⑱ 中屋サワ遺跡



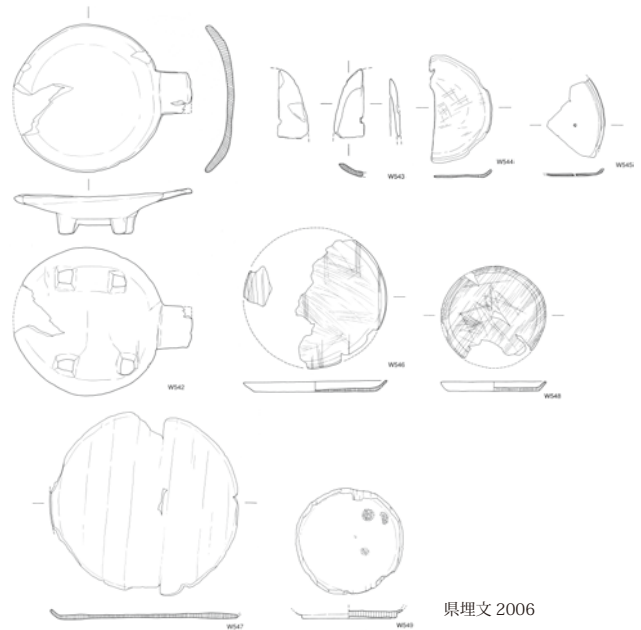
金沢市 2010

⑫ 畝田・寺中遺跡



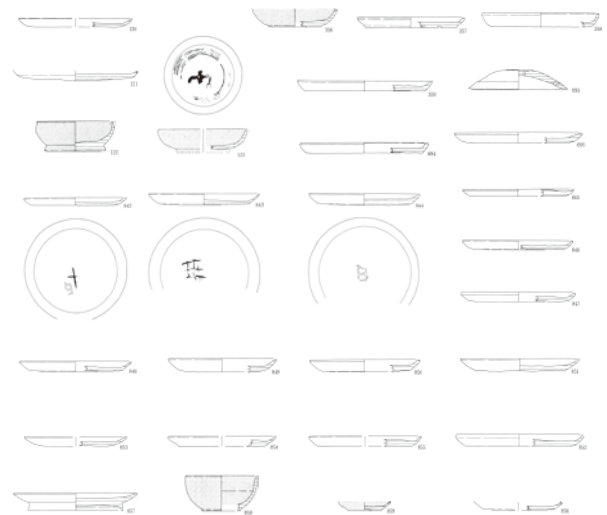
金沢市 2014

県埋文 2005



県埋文 2006

⑲ 上荒屋遺跡

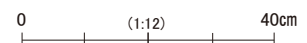


金沢市 2000

⑳ 横江庄遺跡



松任市 1996



当日の記録と資料検討会について

環日本海文化交流史調査研究集会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで沿岸各地域と調査・研究を行い、交流を図るものである。本研究集会は、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成12年度から「環日本海文化交流史調査研究事業」の一環として実施しており、令和元年度で第20回目の開催となる。

今回の研究集会は、日本海沿岸各地域から出土した古代～中世の木製容器に焦点を当て、出土する遺跡の性格やその流通を把握するとともに、本県の特質を明らかにすることを目的とするものである。第18回目の開催となった平成29年度より、調査研究の深化・充実に目的に、1年目を「基礎研究」、2年目をその成果を踏まえた「研究集会」とする形態で行っている当研究集会であるが、今年度はその1年目の「基礎研究」として、首都大学東京の山田昌久特任教授を招き、「日本中近世の資源消費にかかる社会構造変化と技術変化」を題にご講演いただき、講演後の質疑・応答では、2年目の「研究集会」を念頭に、基本的な研究視点・課題等を確認した。

- 1 主 催 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 2 会 場 石川県埋蔵文化財センター研修室
- 3 参加者 当法人職員、県内外の埋蔵文化財関係者、考古学研究者。1日目60名。2日目30名。
- 4 内容及び日程

テーマ 「古代・中世の木製容器」

日 時

1日目：講演・報告 令和2年2月26日（水）午後1時～午後4時30分

・講演

「日本中近世の資源消費にかかる社会構造変化と技術変化」

山田昌久（首都大学東京特任教授）

・報告

「古代能登の挽物について」 久田正弘

「古代北加賀における挽物容器の集成」 熊谷葉月

2日目：資料検討会 令和2年2月27日（木）午前9時～午前11時30分

小松市八日市地方遺跡出土木製品を中心に、資料検討会を行った。使途不明品が少なくない本遺跡資料であったが、山田教授により、器種の特定はもとより、資料を理解する上での観察視点等、数多くの有益な助言をいただいた。



山田講師



会場の様子



久田講師



熊谷講師



資料検討会の様子 1



資料検討会の様子 2

調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容（調査研究集会テーマ）	記録の掲載 （石川県埋蔵文化財情報）
第 1 回	2001.2.23	環日本海交流史の現状と課題	
第 2 回	2002.2.22	鉄器の導入と社会の変化	第 8 号
第 3 回	2003.2.21	玉をめぐる交流	第 10 号
第 4 回	2004.10.24	縄文後晩期の低湿地集落 一 生業の視点で考える	第 11 号
第 5 回	2005.10.29	古代日本海域の港と交流	第 13 号
第 6 回	2006.10.28	中世日本海域の土器・陶磁器流通 一 甕・壺・摺鉢を中心にー	第 15 号
第 7 回	2007.10.27	縄文時代の装身具 一 漆製品・石製品を中心にー	第 17 号
第 8 回	2008.10.26	日本海域における古代の祭祀 一 木製祭祀具を中心としてー	第 19 号
第 9 回	2009.10.24	弥生時代の家と村	第 21 号
第 10 回	2010.10.23	日本海域の土器製塩 一 その系譜と伝播を探るー	第 23 号
第 11 回	2011.10.29	近世日本海域の陶磁器流通 一 肥前磁器から探るー	第 25 号
第 12 回	2012.10.28	中世日本海域の墓標 一 その出現と展開ー	第 27 号
第 13 回	2012.10.26	弥生時代の墓	第 29 号
第 14 回	2013.10.25	舟と水上交通	第 31 号
第 15 回	2014.10.24	江戸時代の墓	第 33 号
第 16 回	2015.10.23	中世前半における輸入陶磁器とその流通	第 35 号
第 17 回	2017.2.24	環日本海文化交流史研究の展望	第 37 号
第 18 回	2018.2.23	近世成立期の土器・陶磁器様相 一 カワラケを中心にー	第 39 号
第 19 回	2019.2.23	北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相 一 城下町とその周辺遺跡の土器器皿（かわらけ）を中心にー	第 41 号
第 20 回	2020.2.26	古代・中世の木製容器	本号（第 43 号）